

皆さんこんにちは。

今日は、大変子どもたちも満足した授業だったと思いますし、「納得した」という感想を書いていた子がいたのが、私はとても印象に残っております。これからあと30分ほど、私は国語教育の専門ではありませんので、国語については十分コメントできるかどうか解りませんが、今年の五月にお話しました小中の連携という視点、そしてそれをカリキュラムとしてどう繋いでいったらいいかというところを中心に、コメントさせていただこうかと思います。

まず、今日の授業についてちょっとだけコメントさせていただきますが、子どもたちも最初は大変緊張しておりました。勘定してみたら子どもの数と先生の数が一緒だったですね。それから、小学校時代に教わった先生、顔を見た先生がいらっしゃっているという状況の中で、最初はたいへん緊張している様子がありましたけれども、だんだんとほぐれてきました。今日の授業のキーワードは「惹きつける工夫」という事でありましたが、それを小川先生は「ビフォーアフター」とおっしゃいました。ご覧になっている方はおわかりと思いますが、リフォームの番組で「ビフォーアフター」というのをやっていますね。「ビフォー」が貧弱であればあるほど「アフター」がすごくいい家になって、うちの女房はあの番組のファンなんですけれども。特に、人がとても住んでいるようには見えない家が、こういう風に匠の手にかかると改装されるのかということがおもしろい。ですからその匠の手っていうのが、今日はモデルになる文例の所だったとおもいますが、そういうマジックを、今日子どもたちは経験したんじゃないかなという風に思いました。最後に笑顔を出している子が非常に多かったのは、授業がうまくいったという印だというふうに思います。

私は国語の専門家ではないですけれども、こういう「書くこと」がいま、日本の子どもたちは非常に力が落ちてきているという事は、申しましたとおりです。PISAなどでも、国際学力テストでも「書かせる」所は無答、白紙が非常に多いです。教育課程実施状況調査でも「何々という言葉を使って文を作りなさい」というのが、軒並み落ちております。で、茨城県もずっと30年ぐらい、4年生から中3まで全県全員の学力診断テストをやっていますが、それを私調べてみたところ、同じように「何々という用語を使って短文を作りなさい」というのが20%も落ちています。

これは、なぜだろうかということで、原因はやっぱり考えてみないといけないと思うのですが、その原因はどこにあるのでしょうか。今日の国語の授業を考えるにあたって、国語教育部の先生方、子どもたちのニーズっていうのをよく調べてみて、たぶんその過程で何か原因が探り当てられているのではないかなと思うんです。私ももっと丁寧に研究しないといけないのですが、たぶん学習指導要領に問題がある。書くことが20%も落ちるっていうのは、指導要領の記述が良くない。とくに小学校の目標の記述が曖昧であると思うのです。それで書くことが手薄になってきたということがてきめんに現れた結果ではないかということです。それで、対処療法というのが教育改革ですので、「朝の読書」ですとか、読解力っていうとすぐ「本を何冊」とか、「書くこと」で言えば「作文」とか言いますが、これではますます逃げていくんじゃないかと私は思います。今日の授業は、そういう意味ではこれまでの作文教育に対して問題提起をなされた授業として、私は受け止めました。

先ほど「話すこと」と「書くこと」の線引きはというお話がありましたけれども、今日は作文ではなくて「スピーチの原稿」でした。原稿だったということが私はみそかなと思いました。作文と、あるいは感想文と言われると、たぶん子どもの方から見ると「またこういうのを書かされるのか」という気分だと思うんですが、今日は作文ではなくて原稿を作るという事が、非常に子どもたちにとって目新しかったという気がします。

私たちも、実はスピーチ原稿ではなくて学会発表の原稿を作ります。学会発表するときは時間が決まっていますので、私は必ず練習します。で、書いて原稿を作ります。次に一度作ったその原稿を通して読んで、それからメモを作ります。そして、手元にそのメモを置きながら発表します。やっぱり最初は時間通り終わらないというのが一番の恐怖ですので。最近は時間オーバーしても平気でしゃべる院生が増えて、みんな学力低下じゃないかって言っているんですけども。時間というのは客観的なもので、どんな偉い先生も、それから院生も同じ時間しか与えられない。そこで平等に発表するというのが学会です。そういう真剣勝負の場ですので、大変緊張して前日はやはりホテルで発表の練習をします。それぐらいやるわけです。学会発表の仕方のスキルというのをもたくさん出ているわけですけども、これはまさに今日の「スピーチ原稿」です。

私はいま若い院生を指導する立場になって、彼らが学会発表するときの準備を何度もやらせるときに、全く今日と同じようなことをやるわけです。で、その時に思うのは、やって見せるということですね。いい発表を見せて、そこから「盗めよ」ということを言うんですが、盗み方が解らない。今日「パクッ

たな」という話がでたんですが、「パクる」ということは、私は学習の「まねぶ・学び」の一つだと思うのですが、文章でいいますと「形態模写」的な事ですね。今日はそれを取り出して、こういう風にやればというノウハウを先に子どもたちに示した。これまでの作文教育でそういうことまでやられていたか、ましてやスピーチというパフォーマンスの場が控えているという、従来のものとはずいぶん違う国語教育の大胆な試みとして、私は注目したいと思います。

今日の資料の中に「バスケット部」のことを書いた作文が、名前は消えていますが、ちょっとご覧ください。ちょっと読みます。「私はバスケ部なので、やっぱり部活をやっていると帰る時間が遅くなったり、家に帰ったら7時になってるとかよくあります。そこから勉強をやったりして、私が寝るのはだいたい11時過ぎになっちゃったりしますね。でも部活によって時間が違いますけどね。でも、部活が終わったらまっすぐ寄り道しないで早く帰ると、宿題も早くできるし、その分寝る時間も増えると思います。でも、部活が疲れて宿題をしないで寝てしまう時があります。起きると、9時になっていたり、宿題を起きてすぐやったり、もしくは次の日に朝やったりしています。でも、、、」という風に「でも」が多い。この子は一生懸命たぶん書こうと思っているんですけど、接続詞をつかって論理展開まではいきませんけれども、一つの文章の展開をやるっていうことのスキル、私はスキルといいますけれども、技法が習得されていない。ですから「でも、でも、、、」と四つあってその最後の所は「が」が二つになっております。いまの子どもたちの作文のニーズはどこにあるかということ、書けることは書くんだけれど、そのつなぎ方っていうかその技法を、切実な教育要求としてそれを教師がどうくみ上げて単元として立ち上げるかということが、まさしく「ニーズ把握から始まるカリキュラム開発」と重なっているなあとと思います。

で、実は私も今こんな顔をしています、小学校の時はたいへんに作文が嫌いでした。今は論文を書いたりして偉そうな顔をしています、先生に「田中は読解力がない」と言われたこともあります。その時に「読解力」ってどういうものなんだろうと思って、本屋に行って「読解力」というのを探した。一応その辺から修行はしたんですけど、「読解力をつける問題集」なんてのを買ってきて、やったりしたことがあります。これは小学校4年か5年だったと思います。先生にそういう風にレッテルを貼られたことに対して、僕は非常にショックだったものですから、なんとか見返してやろうというのが動機だったのですが、おかげでその時に力が付いたのかどうか解りませんが、人の論文を読んで「あ、この人はこういうパターンで論文を書く人だな」このパターンを形態模写する、ある意味で中身は別なんだけれども、その人の論理展開のパターンを模写するっていうことで学んできた、ということが多いです。

「わかりやすい文章を書くにはどうしたらいいのか」これは、自己流で作っていくしかないと思うんです。パターンを学びます。清水義範という作家の方が愛知教育大学出身ですが「パスティユ小説」というのを書いていらっしゃるんです。「パスティユ小説」というのは、文体模写、回覧板の文章とかですね、ここにゴミを捨てるなという怒った文章、あの文章、達筆で書かれているのよくありますよね、「何々すべからず」とかいう、あれをまねした文章とか、あるいは社史、会社の歴史、必ずあるんですけど、誰も読まないっていうのがあるんですけど、それを形態模写して文章化するとかで有名になった方です。で、彼の書いたもので私が大学で薦めて、大学でベストセラーになったのが「蕎麦ときしめん」という本です。これは、実は誰を形態模写したかということ、イザヤ・ベンダサン「日本人とユダヤ人」いや「ユダヤ人と日本人」だったかな、あれはユダヤ人を東京人にして、日本人を名古屋人にしたもの、だから「蕎麦ときしめん」。その彼が書いている文章形態をまねして「蕎麦ときしめん」というタイトルにして、「名古屋人がいかに東京人に対してコンプレックスを持っているか」という事を赤裸々に書いているのですが、これがすごく名古屋人をバカにしてるっていうのです。まあ本人は名古屋人なんですけどね、ましてやその出版社の名前が本山書店。山本書店が確か「ユダヤ人と日本人」を出しているし、名古屋に本山って言う場所があるんですけど。まあそんな話をしているときりはありませんが、そういう形態模写的な事は、実は今まで誰も教えてこなかった。「誰も教えてこなかった文章術」なんてのがありますけれども、ああいうの読んでも実は解らない。みんな手の内を証さない。だけど、実は文章はこうやっちゃえば簡単に書けちゃうんだよっていうことを、どこかで国語の先生が後押ししてくださると、子どももすごく突破できるんじゃないかな。いま、日本の子どもたちが「書けない、書けない」とうことで作文教育をやらせたりと、昔の事が復活していますが、私は今の子どもたちにフィットするのは、今日のような授業、単元じゃないかというふうに感じました。

今日は、小中連携のための小さな視点と大きな視点ということで、お話ししたいと思います。

小さな視点からまず申しますと、今日はビデオレターによる小学校6年生へのメッセージ作りという単元を作っていたいたということ。これは、小さな視点から見ますと、まずニーズ把握です。ア

ンケート調査もやって頂いて、中一生が小6生にという交流を開く回路、で自分の小6時代を振り返りながら今の自分を見つめるという状況設定の中で、ビデオレターを作るというところが非常に良かったと思います。まあ、中国の方にも6月に送られたそうですが、先方がかなり怒っている状況の中で、ビデオレターというのはかなりまずいセッティングだったかもしれない。小6生に送るのはいいと思います。すぐ隣の国にというお話もありましたけれども、いまビデオレターっていうと外国のおじいちゃん、おばあちゃんにという感じで送ったりしています。遺言もビデオレターっていうのもあるらしいですね。それは採用されるらしいという話も聞きました。また、つまらない話をしましたけれども、私は単元というのはまとまりをつなぐ、目線という視点じゃないかと思うのですが、その点で今日の単元作りっていうのは、どんな力をつけたいのかっていうときに、今の子どもたちにどんな力をつけさせることが必要なのかという先生の目が非常にはっきりとあったのではないかと思います。

たとえば、「たくましい」という言葉が使われますが、国語科の目標として「明確さ」ということと「適切さ」ということばが使われていまして、「明確さ」「適切さ」というのを、子どもはどういうふうにして判断できるのだろうと考えたときに、コミュニケーション力というのがみえてきます。私はコミュニケーションスキルというふうにあっさり言ってしまったほうがいいというので、品川でそう言ったんですが、国語の先生がなかなかそれについてくださいませんでした。でも、ある時から国語の先生がのり始めたのは、子どもが変わったとき。かん黙児とされていた子にプレゼンテーションスキルを何度かインプットして、「さあ、やってごらん」といったら、その子がしゃべったという非常に感動的な場面があった。「え、あの子しゃべるんだ、人前で」というマジックみたいな事が起こった。「へえ、いままでこんな事教えてこなかったから、あの子しゃべらなかったのかな、本当は、内部にずいぶん持っていたのかな」というように、アプローチを変えてみるとこんな事が起きるんだという手応えがあった時に、国語教育という枠から一步踏み出して、コミュニケーション力をつけるんだというふうに先生方の視線が移っていったということ、私も経験しております。

今日の授業は、そういう点で単元作りをしっかりとやっていただけたということ、私は大変評価したいと思います。願わくば、子どもたちはこれをどう受け止めたのだろうかと、ちょっと授業評価的なことをやってみたり、それからこのビデオはたぶん小6生に見せるんだと思うのですが、今度は小学校6年生はこれをどう見たのだろうかと、ということ、あるいは、小学校の先生はそれをどう見たのかとか、またコメントをビデオにして返すとかですね、そういうのがもし可能になれば、小中の連携が違う形でできるのではないかなと思います。

それにしても、今日「不安」というお話があったのですが、小学校6年生がこんなに勉強やテストのことを心配しているっていうのが、私はまじめだなあと思ってしまいました。むしろ中学校で一番大きな課題は、同性の友達ができるかどうか、親友がですね、これが私は生命線だという風に思っているんですが、そのことはほとんど出てこなかったんですけれども。小学校6年生が勉強やテストの事を心配しているというのが、ちょっと意外に思いました。そう言う点では小学校6年生のもっているニーズもそこからかいま見えたような気が致します。これがミクロな視点というのでしょうか、単元を作っていくときの視点として、ニーズ把握から始めていってどんな力をつけさせるかという目標設定に変換するときに、今日は「惹きつける工夫」というキーワードを設定されたということ、このキーワードが出てくるまでに、かなり苦労されたんじゃないかな、国語科でかなり協議をやられたんじゃないかなと思います。そこを煮詰めていただくのが、単元を目標化する時には大事なことです。

これが、私は理論的スキルから実践的スキルへと言っているのですが、理論的スキルだったら学者はいくらでも出しています。「コミュニケーションスキル」とか「ヒューマニゼーションスキル」とかでですね、もうスキルばかりです。問題はそれを単元に乗せるときに、ぴたっと来るキーワードを実践者がどういうふうに見出せるか、そこに私は実践者の知恵というかプロフェッショナルな部分が一番活かされるのだと思います。学者は英文のものをいっぱい勉強して横文字、縦文字にするのが得意ですので、いくらでも紹介しますけれども、それならお前やってみろ、といったときにやれるかどうかと言うとほとんどできません。実践家の一番専門性が発揮される場所は、単元を作るときの単元の能力成分についてどんなキーワードを見出せるかと言うところに求めたいという気がいたします。そして、そのキーワードは必ずフィードバックといいますか、評価ができる、実践が良かったかどうかと言う振り返りができるようなものにして頂ければと思います。

ですから、ある意味では今日は惹きつける工夫という事をいろいろして、少し入り口には立ったと思いますけれども、逆にいうと「惹きつけられない」ということがわかるかどうか、というのもセンスだろうと思いますね。これだけではだめだという話が出てきました。ずいぶん良くなったという判断が出てきました。そういう判断ができるということが、まさしく自己批評力、子どもの自己学習力につながるものではないかなと思います。これを糸口さらに単元を改良されて、他の中学校に普及させていただ

くといいいかなと思います。

二番目の大きな視点として、小中連携のカリキュラムをどう作るか、どう位置づけるかということなんですけれども、これはカリキュラムマネジメントとか、教育課程経営の視点だと思います。大きな目標として、今日の常盤中学校では「たくましい人になる」という学校教育目標があります。私はこれは大きな目標だと思います。9年間でたくましい人を育てるということを小中で共有していく必要があるのではないかと思います。9年間でどんな15歳を育てるのが、たくましいとは具体的にどういう事なのか、というところです。

今日は13歳でした。13歳といえば、「13歳のハローワーク」という本を村上龍さんが書いた事でも有名なんですけど、今小中連携のカリキュラムを作ろうというときに、何をとりかかりにしようか。たとえば京都の教育大学は「キャリア教育」を、ハローワークみたいなものですが、キャリア教育を軸にして小中連携のカリキュラムを作ろうとしています。品川の場合は「スキルアップ」ということで作ろうとしてきました。それから「コミュニケーション」を軸にして作ることもできるんじゃないかと、私は感じています。そう言う意味では、今日の単元はそういうふうに発展させていける可能性を持っています。先ほどスモールステップ状にしてというお話がありましたが、大きなねらいの中で、どんなねらいをもって一貫させるかということ、を、「書くことと話すことのつながり」というひとつのオーバーラップした部分だろうと思うのですが、これを9年間でどんな15歳をそだてるかという大きな枠の中で見て頂けるといいかなと思いました。

それを実践してくださいというよりも、今日実践されたことはいったい9年間という幅の中で考えると、中1が良かったのかということなんです。中3でも良かったんじゃないかと、いろんなパターンが考えられると思うんですね。小1生が幼稚園にビデオレターというのもあり得るかもしれない、とか、小さな単元ですけどさまざまな応用性を持ったカリキュラムだったと評価できるんじゃないかと思います。

それから国語科の9年間のスキルで考えてみることもできると思います。さきほど、「話しかけるように書けばいいんだよ」という小川先生の示唆が子どもを動かしたというお話がありましたが、英語でも「書ければ話せる」ということを言っている人もいます。書くと言うことは、話すことをよりレベルアップしたり、論理性を持たせたりするうえでは、非常に大事なことだと思います。書いて覚えるとかいうようなこともありますし。私はこれは脳科学の問題とからめて、非常に興味深い感じがします。今日は映像と一体化してとらえられないかということが非常におもしろいテーマだったと思います。

それから、全校のカリキュラム、たとえば他の教科や他の領域にもかなり繋がるものですし、上高井のカリキュラム、小中連携による学力保証という問題に対しても、かなり一般性をもっている題材かなと思うのです。これをためしに今度は地域の皆さんにビデオレター、他者をかなり意識させるという点ではそういうこともできるかもしれない。ビデオっていうのは記録として残りますので、個人情報がどうのこうのといわれると非常に難しいところもあるのですが、一つの実践として上高井ではこういう事をやっているらしいよという、名物実践にしていける可能性も秘めているかなと思います。まあVHSビデオテープがいつまで残っているかはわかりませんが、これからひょっとしたら携帯でそんなことができるかもしれないかなといういろんな可能性を持っていますよね。海外にビデオを送るとかいうんじゃないで、ひょっとしたら中国に即送れるという時代が来るかもしれない。そう言う可能性まで持っている題材として注目できるかなと思うのです。

最後に実践研究としての意義と課題について述べて終わりたいと思います。

今日は、単元を開発するという研究として、大変意義のある研究だったと思います。それもショートプログラムとして作られた。7時間でしたか、中国のビデオも入れるともっと長いかもしれませんがあまり長いものを引っ張るよりもかなり短期間で行った方が、スキルのなものはインプットできるかもしれない。それから反復した方がいい。特に小学校の中学年ぐらいまではそういう訓練的なものが必要なの時期もあると思います。私は、100マス計算は必ずしもいいとは思いませんが、集中力を高めると言ったような意味では、かなり機能はしているようです。

それと技法習得を中心にされたということ、これも私が品川区でやりましたのは「何日までに単元を開発してください」とかいうかなり厳しいことをいいながら作った単元ばかりだったので、かなり無理がありました。その点、今日はかなり熟成されて作られたという感じがあり、こちらの先生方の力量を感じるような思いがいたしました。

それから、学力論としてとらえると、教科を超えた学力というか、まさしく生きる力に近いように思います。今コンピタンスとか言う言葉も出てきていまして、コンピタンスとは新しい能力概念として言われるんですが、人間の自信みたいなものに裏打ちされた実際的な能力です。環境とかなり活発に相互

作用できるようなそういう能力というのをコンピタンスというんですが、私はコミュニケーション力というのは、まさしくコンピタンスのおおもとにあるものではないかと思うのです。中学校時代にそういうトレーニングを積んだ子は、かなり強いと思うんです。大学生の「冬の時代」は終わりましたが、面接とかで非常に挫折して帰ってくる子が多い。もうちょっと強くなって欲しいなという気がするんです。面接で泣いたりとかするのはなく、もうちょっと心臓をつけてほしいというときに、こういう教科を超えた学力という視点はいいかと思います。

課題として二つほど言わせてもらえば、過去にもこういう実践がもしあったとすれば、その実践をどういう風に超えようとしているのかとか、どういう提案を狙った授業なのかということ、もっとはっきりと出していただいても良かったかな。その方が先生方にももっとインパクトがあったし、その分質問ももっととんがったものが出てくるかもしれないと思うんですが。質問が多いということはインパクトがあるということです、提案をもっと出して頂いてもよかったかなと思います。

それから、ちょっと出でましたけど、読みの力ということの課題ももちろんあるわけです。読みと書き、私は書く方から先にやった方がいいかなと思っているんですが、全国的には朝の読書とか、今中教審で出しているのは到達目標6年間で何十冊とか数値目標化しようとか、まあそんないろんな議論が出ています。読む力については、どうやったらいいのでしょうかということも、読解力のない子どもたちが増えているという事に関して、是非国語科の先生方から、また提案していただくと、他の教科に波及できるんじゃないかと思います。こちらの研究会は教科別になっていますけど、これからは教科をまたがって学力というものを考えてみていただきたいと思うし、今日の授業はそういう点では学力というとらえ方についても、非常に新しい視点を打ち出された授業として良かったなと思います。